

スピノザにおける「完全性」について

——「健康」概念の再検討のために——

中野彰則

(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、哲学)

はじめに

われわれは一般に、四肢に障害を負っている状態や病気を患っている状態を、障害を負うことで「不完全」な状態にある、あるいは有害な「悪」としての病気を患っている状態にある、というように考える。つまり、「完全」であり「善」としての健康ないし健全であることをひとつの基準にして、そうしたものの欠如態として障害や病気をとらえている。しかし、そもそも「不完全」や「悪」の基準となっているような「完全」や「善」とは一体何であるのか。

本論でわれわれが検討を加えるつもりである、十七世紀オランダの哲学者であるスピノザにおいて、「不完全」や「悪」の問題はとりわけ形而上学の問題であって、医学あるいは医療としての観点から直接的に論じられているわけではもちろんない。しかし、健康やそれにまつわる障害や病気についての考え方が、上で見たような価値観と無関係ではないとすれば、形而上学としての「不完全」や「悪」の問題についての考察にも、何らかの形で医学や医療に資するところがあるだろう。本論では、その諸著作に一貫して現れている、「完全」「不完全」や「善」「悪」についての一般的な見解に対するスピノザの批判と、スピノザ自身の考える「完全性」についての見解への考察を行い、その考察を踏まえた「健康」概念の再検討を通じて、「医の倫理」について考える何らかの手がかりを得ることを目指したい。

1. 「不完全」と「悪」の起源

例えば『書簡集』に収められている、「不完全」や「悪」という概念を巡る議論が行われているブレイエンベルフ宛てのある書簡において、スピノザは「私に関する限り」と断りながら次のように述べる。

「私は罪や悪が積極的な或る物であるとは認めることが出来ません」(Ep19 [邦訳 96 頁])。

スピノザは「悪」を何か積極的な意味をもつものであるとは考えない。その理由について、完全性の問題に言及しながら、スピノザはさらに次のように続ける。

「存在する一切は他物と関係なしにそれ自体で見られる限り或る完全性を含んでいることを我々は知っています。この完全性はどんな物においてもその物の本質自身の及ぶ範囲まで及びます。本質と完全性は実は同一のものなのだからです。私はここに禁

ぜられた木の実を食おうとするアダムの決意、或いはそのように決定されたアダムの意志を例に取りましょう。この決意或いはこの決定された意志は、それ自体だけで見られる限りそれによって表現された実在性と同じなだけの完全性を含んでいます。このことは次のことから、即ち我々は或る事物よりもより多くの実在性を有する他の事物を眼中に置く時にのみその或る事物の中に不完全性を認め得るということからわかります。ですからアダムの決意をそれ自体で見、これをより完全な他の物或いはより完全な状態を示す他の物と比較しない限り、我々はその決意の中に何らの不完全性を認めることが出来ないのです」(ibid.)。

これとは別に、スピノザはその主著である『エチカ』第四部の序言において、「完全」と「不完全」の最初の意味とはどのようなものであったのかについて考察することから始めている。スピノザは、人間の手によって製作される人工物を例にして、「完成されている[完全である]」ということと「完成されていない[不完全である]」ということについて述べる。それによれば、例えば、われわれがある作品について、完成あるいは未完成であると言い得るのは、その作品の作り手の意図ないし目的を理解しているからである。つまり、あらかじめわれわれはそれらを理解しているからこそ、作品の状態を見て、それが完成されているあるいは完成されていないとすることが出来る。しかし、これまで類例を見たことがなくまたその作り手の意図や目的を理解していない場合、われわれにはそれが完成であるとも完成していないともいうことが出来ない。そして「一般的観念」が形成されるようになると、つまり事物の型とも言うべきものが生み出されてからは、人間はそれに合致したものを完全であると見なし、たとえ作り手の側が完成していると考えるものについても、それに合致しないものを不完全であると見なすようになる。この議論は自然物についても同様に言い得る。

「人間は、自然物についても、人工物についてと同様に一般的観念を形成し、これをいわばそれらの物の型と見なし、しかも彼らの信ずるところでは、これを自然（自然は何ごとにも目的なしにはしないと彼らは思っている）が考慮し、型として自己の前に置くというのである。このようにして彼らはあらかじめ同種のものについて把握した型とあまり一致しないある物が自然の中に生ずるのを見る時に、自然自身が失敗しあるいはあやまちを犯して、そのものを不完全にしておいたと信ずるのである」(E4Praef [下巻 8 頁])。

例えば「人間」についての型あるいは「一般的観念」が形成され、それとある特定の人間とを比較することによってその人間について「不完全」ということが言われる。あるものが「不完全」と言われるのは、「それらの物自身に本来属すべき何かが欠けているとか、自然があやまちを犯したとかいうためではない」(ibid.)。したがって、「完全および不完全とは実に単に思惟の形態にすぎない。すなわち我々が同じ種あるいは同じ類に属する個体を相互に比較することによって作り出すのを常とする概念にすぎない」(ibid.)。

あるものが「不完全」であるというのは、「他の事物を眼中に置く時にのみ」生ずる。書簡の例に倣って言うならば、アダムの決意よりも「不完全」に思えるようなものと比較する場

合、アダムの決意はそれよりも完全なものであるということになるだろう。「不完全」であるということは、常にそれよりも完全と思われる他のものと比較された上での相対的なものでしかない。したがって、「単に不完全性の表示に過ぎないところの罪[悪]」というものは、実在性を表現する或るものの中に、例えばアダムの決意とその遂行の如きものの中には存し得ないということが明瞭に帰結される¹。このようにして、冒頭で述べたように、「悪」とは何か積極的なものとは考えられないということになるのである。

2. 「欠如」と「否定」

ところで、スピノザはまた次のように述べる。

「さてアダムの意志乃至決意はそれ自体で見れば悪でなく、また本来の意味では神の意志に矛盾したと言えないのですから、この帰結として神はアダムの決意の原因であり得ること、否、貴下が正しく注意されたようにその原因でなければならぬことになります。しかしこれはアダムの決意が悪であったという観点から言っているのではありません。なぜというにその中に存した悪はアダムがあその行為のゆえに失わなければならなかったより完全な状態の欠如にほかならなかったのです。そして確かに欠如は積極的な或るものではなく、またそれは我々の知性に関連してのみ欠如と呼ばれるのであって、神の知性に関連してはそう呼ばれ得ないのです」(Ep19 [邦訳 98 頁])。

すでに確認したように、「悪」は積極的なものではない。神が何らかの「悪」についての原因であると考えてはならない。しかしながらここでスピノザは、「悪」が「より完全な状態の欠如」であるとは「神の知性」においては呼ばれ得ないが、「我々の知性に関連してのみ」それは呼ばれ得ると述べている。それではそのような「欠如」とはいったい何か。

「この名称は次のことから生じています。即ち、我々は同じ類に属するすべての個物を、例えば人間の外形を有するすべてのものを、同一の定義で表現し、そしてこのため我々はすべてのものがこの定義から導き出され得る最高完全性に同等に適當すると判断します。しかもその行為がこの完全性と矛盾する或る物を発見する時、我々はその物を以て、そうした完全性を欠如しまたそのもの自身の本性から逸脱していると判断するので」(ibid.)。

ここでは、先ほど見た『エチカ』における「不完全」についてのものとよく似た議論が展開されている。すなわち、「欠如」とは「不完全」と同様、あらかじめ形成された「一般的定義」を基準にしてある事物と他の事物を比較して作り出される概念に過ぎない。しかし、この引用に続いて、先ほどと同様、完全性の「欠如」という観点において再び「神の知性」と「我々の知性」との区別が導入され、そのような「欠如」とは「我々の知性に関してのみ言われ得るのであって、神の知性に関連しては言われ得ない」とスピノザは述べている。しかしまさに、ブレイエンベルフはここを問題にする。全ては完全性を含んでおり、不完全なものなどないと言われているにもかかわらず、「悪はより完全な状態の欠如にほかならなかった」、あ

るいは完全性について「我々の知性に関してのみ言われ得る欠如」とはどのようなことであるのか。

確かに、一般的に「不完全」や「悪」と言われているようなものであっても、常に完全性を含んでいるのであって、「存在すること自身は何ら悪でも不完全でないにしても、存在する物の中に或る悪が起り得るということは認めねばならぬ」のではないのか。ブレイエンベルフは先のスピノザからの書簡と再度『デカルトの哲学原理』を引用したうえで、「悪はより完全な状態の欠如にほかならなかった」という先ほどのスピノザの書簡の表現を踏まえて、以上のような問いを立てる。つまり、あらゆるものがその本質において完全なのだとするならば、そのものの状態は何があらうと完全なはずである。したがって、「どのような風にして悪が——貴下がよりよき状態の欠如と名づけられる悪が存在し得るでしょうか」（Ep20 [邦訳 105 頁]）。確かに、あらゆるものはその本質において完全であるというのであれば、ある事物についてそれを他の事物と比べることによって「悪」があるとは言えず、それは「何ら悪でも不完全でない」かもしれない。それは認めよう。しかし「悪はより完全な状態の欠如にほかならなかった」というのは、結局「存在する物の中に或る悪が起り得る」、つまりある事物について「我々が我々に与えられた力を誤用して」「より完全な状態の喪失あるいは欠如」が起るのではないか、そこには「悪」というものを認めざるを得ないのではないのか²。その事物を他の事物と比べるというのではなくそれ自体で見える限りにおいて、神によってではなく「その不完全性を私自身の過失によって引き起こしたとするなら」（ibid.）そこには「悪」が生じているとは言えないのだろうか。

ブレイエンベルフはさらに、これに対するスピノザの答えをあらかじめ予想して、それは次のようなものではないかと言う。

「しかし貴下は言われるでしょう。我々はより完全な状態の欠如によってより少い善には陥るが絶対的な悪には陥らない、と。……[ブレイエンベルフが言いたいのは]ただより善き状態からより悪しき状態に陥ることが我々においてより悪しき状態あるいは悪しき状態と呼ばれないか、また当然そう呼ばれるべきでないかということです。しかし貴下は反駁されるでしょう。この悪しき状態にはなお多くの善が含まれている、と」（ibid. 括弧内引用者）

ブレイエンベルフはここで、スピノザの言う「悪」とは、言ってみれば完全性の段階の低い「善」としてあるようなものではないのか、と考えている。またブレイエンベルフはこの書簡の別の箇所において、スピノザの言っていることとして次のようにまとめていた。「貴下はこう言われるもののようです。『それは悪ではなく単により少い善と名付けられるべきだ。というのは事物はそれ自体で見れば完全性を含んでいるのである。』」（ibid.）。つまり、ブレイエンベルフによれば、スピノザの考えとは、各々の本質において完全であるような事物とはその完全性ゆえに全くの「善」であって、相互に比較することによってそこに「不完全」や「悪」を認めることは出来ない。そしてある事物そのものにおいて「より完全な状態の欠如」が生じたとしても、それは「悪」などではなく、あくまでより程度の低い「善」に過ぎないのである。ここでブレイエンベルフはスピノザの見解をある種の弁神論のようなものとして考えているのではないだろうか。このように見るならば、ブレイエンベルフとス

ピノザの間には、それを「悪」と呼ぶか、あくまでも「善」であると言うかの違いしかなくなってしまうだろう。しかし、「悪とはより少い善である」などということはスピノザ自身少しも言っていないし、例えば『エチカ』においても述べられていたように、スピノザにおいては「悪」がわれわれの思惟の様態にすぎないのと同様、「善」もまた何ら積極的な意味を持つものではない。ブレイエンベルフはしかし自分の見解に基づき、スピノザを次のように問い質す。

「しかし貴下は多分これに対してこう言われるでしょう。私がここに挙げたような行為 [不貞・殺人] は全くの善であって何らの悪をも伴わない、と。しかしそれでは私は貴下が悪と名づけている物、より完全な状態の欠如を結果するその悪なるものが何であるかを理解することが出来ません」(ibid. [邦訳 112 頁] 括弧内引用者)。

スピノザはこれに対して、ブレイエンベルフが挙げているような罪「悪」の例から害「悪」へと話を移し、見えていた目が見えなくなった人を例に挙げて次のように答える。

「欠如とは欠如をもたらす行動ではなくて只単に或ることがらが欠けている状態であり、これはそれ自体では無なのです。欠如とは我々が物を相互に比較する時に形成する理性の有或いは思惟の様態にすぎないのです。例えば我々は、盲目者を目して彼は視力を欠いていると言います。これは我々がとかく彼を視る者として表象するからです。この表象は、彼を目の見える他の人と比較することから、或いは彼の現在の状態をまだ目の見えた彼の過去の状態と比較することから起ります。そして我々がこの人間をこのようなふうにして考察する時、即ち彼の本性を他の人々の本性と比較するか或いは彼の過去の本性と比較して考察する時、視力が彼の本性に属すると考え、そしてそのため我々は彼が視力を欠如していると言うのです。しかし神の決裁とその決裁の本性を考察する時、その人間が視力を欠如していると言い得ないのは石が視力を欠如していると言い得ないのと同様です。なぜならその時期にはその人間には石に視力が属していないと同様の当然さで視力が属していないのですから。つまり、その人間には神の知性と意志に依って賦与された以上の何物も彼のものでないのです。ですから神は石が見えないことの原因でないと同じようにその人間が見えないことの原因ではないのです。この場合、見えないということは単なる否定にすぎないのです。……結局欠如とは或る物の本性に属すると我々の判断することをそのものについて否定することにほかならないし、否定とは或る物の本性に属しないところのことをそのものについて否定することにほかならぬのです」(Ep21 [邦訳 128 頁])。

ブレイエンベルフは言うだろう、目の見えない人を他の人と比べて、目が見えないそのことが「悪」であるということは、各々のものはその本質において完全なのであるから言えないかもしれない。しかし目の見えていた人が見えなくなるということは、実際により完全な状態の欠如が起きているのではないのか、それは「悪」ではないのか、と。しかしスピノザによれば、われわれが目が見えない人について語る場合、「見える」ことがその人の本性に属するものと考えて「見えない」と言うのならば、それは「欠如」ということになるが、

「見える」ことがその人の本性に属さないものと考えて「見えない」と言うのならば、それは「否定」なのである。それはあたかも「延長は長く持続しない場合、或いはその場所を保ち得ない場合、或いは大いさが足りない場合に不完全と言われる」が、「延長は思惟しないから」と決して不完全だとは言われません。延長の本性はそうしたことを要求しないからであるというように³。あるものにおいて「欠如」が生じるというのは、そのものを別のものと比べることによるだけでなく、あるものの以前の状態と現在の状態を比べる場合にも当てはまる。スピノザが「悪」はより完全な状態の欠如にほかならないのであって、「欠如」は我々の知性に関してのみ言われ得ると述べる時、結局そうした「欠如」とは「それ自体では無」なのであって、「不完全」について言われていたのと同様「思惟の様態にすぎない」。

3. 「完全性」の新たな意味

「不完全」や「悪」はそれ自体なにものでもなく、積極的なものではない。結局それらはわれわれにとっては何の意味も持たないのだろうか。われわれはただかくある現状を肯定するだけに終始すればそれでよいのだろうか。だが、先に引用した、「完全」と「不完全」、「善」と「悪」について述べた『エチカ』第四部序言は、次のように続けられている。

「事情はかくのごとくであるけれどもしかし、我々はこれらの言葉を保存しなくてはならぬ。なぜなら、我々は、眺めるべき人間本性の型として、人間[について]の観念を形成することを欲しているので、これらの言葉を前に述べたような意味において保存するのは我々にとって有益であるからである」(E4Praef[邦訳下巻 11 頁] 括弧内引用者)。

「完全」「不完全」、「善」「悪」といった概念がいかに誤りであるかをスピノザ自身あれほど述べているにもかかわらず、こうした語を「保存する」ことはわれわれにとって有益なものであると言われる。それではその理由として言われている、「我々は、眺めるべき人間本性の型として、人間の観念を形成することを欲している」というのはどういうことだろうか。「人間本性の型」あるいは「人間についての観念」とは何であるのか。例えば、スピノザが同様の議論を行っている別のテクストを参照してみよう。初期の著作の『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』には「善及び悪とは何か」と題されている章がある。

「或るものが善いと言われるのは、それほど善くない或る他のもの、或はそれほど我々に有用でない或る他のものに関係してのみ言われるからである。例えば、或る人間が悪いと言われるのは、より善い人間と比較してのみ言われるのであり、或る林檎が悪いと言われるのも、善い或はより善い他の林檎と比較してのみ言われるのである。すべてこうしたことは、比較してそう呼ばれる他のより善きもの或は善きものが存しなかったとしたら言われ得なかったであろう。従って或る物が善いと言われるのは、それがそうした物について我々の有する普遍的観念〔一般的観念〕と一致すると言う意味にほかならない」(KV 1/10 [邦訳 107 頁])。

ここでもまず、『エチカ』や『書簡集』と同様、「善」や「悪」とはあるものと他のものの比較によって生じるのであって、事物の「関係」についてのみ言われうるものであるとされている。ここでスピノザは、あるものが「善」であると言われるのは「普遍的觀念」あるいは「一般的觀念」と一致するからであると述べる。これについても、すでにわれわれは『エチカ』においても、また、『書簡集』においても「一般的觀念」という語の代わりに「一般的定義」という語が用いられこそすれ、同様の議論を見た。したがって、スピノザの言う「人間本性の型」あるいは「人間についての觀念」とは何であるのかを考える時、それはすなわち、われわれが「不完全」や「悪」を見出す際に参照してしまうような「一般的觀念」や「一般的定義」であってはならないということになるだろう。また、「善」と「悪」について再び取り上げられている別の章を見てみよう。

「我々は先に、すべての事物が必然的であること、又自然の中には善も悪もないことを述べた。従って我々が人間について要求する一切は人間の類にのみあてはまる。そしてこの類は理性の有にほかならない。しかし我々が我々の知性の中に完全な人間の觀念を形成する場合、それは（我々が我々自身を観察する時）そうした完全性へ到達する為の何らかの完全な手段を有するかどうかを顧るよすがとなり得るであろう。そしてこの際我々をそうした完全性へ促進する一切を我々は善と名付け、反対にこれを阻害するもの、或はそうした完全性へ我々を促進しないものを悪と名付けるのである」（KV 2/4 [邦訳 125 頁]）。

繰り返すが、「善」や「悪」は自然においては何ら積極的なものなどではない。しかしそれが適用されてしまうような「人間の類」とは、個々の人間の表象像からそれらの人間全体の一致点を抽象することによって形成される「一般的概念」⁴、「一般的觀念」、「一般的定義」としての「人間一般」にすぎず、本来実在しないものを実在するものとして混同してしまうような「理性の有」にほかならない⁵。しかしだからといって、「善」ならびに「悪」というものが意味を持たなくなるわけではない。それらは、われわれが「完全性へ到達する為の何らかの完全な手段を有するかどうかを顧るよすがとなり得る」有益なものである。これをふまえて、再度『エチカ』第四部序言を見てみよう。

「私が『ある人がより小なる完全性からより大なる完全性へ移る、あるいは反対により大なる完全性からより小なる完全性へ移る』と言う場合、それは『彼が一つの本質ないし形相から他の本質ないし形相に変化するという意味で言っているのではなく（なぜなら例えば馬が人間に変化するならそれは昆虫に変化した場合と同様に馬でなくなってしまうから）単に『彼の活動能力——彼の本性を活動能力と解する限りにおいて——が増大しあるいは減少すると考えられる』という意味で言っているのであって、この点は特に注意しなければならぬ』（E4Praef [邦訳下巻 11 頁]）。

ある人において完全性の移行が見られるというのは、その人の本質が変化するということではない。例えば「目が見えなくなる」ということが、その当人の本質の変化であってそれが「より大なる完全性からより小なる完全性へ移る」ということではない。たとえ目が見

えなくともそれはその人自身の本質と考えられなければならない、その人は常に完全性においてあるのであって、目が見える人あるいはかつてその当人自身の目が見えた状態と比べて、目が見えなくなったその人が「不完全」であるなどということはない。ここで述べられている、「より小なる完全性からより大なる完全性へ移る、あるいは反対により大なる完全性からより小なる完全性へ移る」ということは、その人にとって外在的であるようなものの比較において言われうるのではなく、その「活動能力」すなわち当のその人自身の本性にとって内在的であるようなものの増減において言われうるのである。そしてスピノザ哲学においては、そのような活動能力の増減を示す指標として働くものこそが「喜び」と「悲しみ」にほかならない⁶。

こうして、「完全性」は新たな意味を持ってくる。われわれは事物そのものにおいて、それが「完全」であるとか「不完全」であるとか言うことはできない。ある事物が他の事物との比較によって「完全」であるあるいは「不完全」であると言われる時、それは事物そのものについて示される何ら実在的なものではなく、事物間における「関係」を示すだけの「理性の有」あるいは「思惟様態」にすぎない。あらゆる事物はそれ自体で見られる限りにおいて常に「完全性」を有しているのである。そしてスピノザにおいては、ある人が「より完全あるいはより不完全」であるということとは、「完全性」の「移行」においてのみ言われうる。すなわち、その人が「より完全あるいはより不完全」であるということとは、その人自身が「喜び」を感じるか「悲しみ」を感じるのかによるのであって、その人についてのいかなる比較においても言われえない。すべてはその当人自身が「喜び」を感じるか「悲しみ」を感じるかにかかっているのである。

むすび

スピノザは一貫してその著作の中で、われわれが日常用いている「不完全」や「悪」といった概念について、何度も繰り返して批判する。その批判とは「それ自体では無」であって「思惟の様態にすぎない」ものを何か実体化して考えようとする事への反駁に他ならない。スピノザは、本来われわれの様態にすぎない「悪」が実体化され、それが超越的な価値観や権威とされることを断固として拒否する。だからといってスピノザは、個々のものにおいて「完全」であればそれでよい、あるいは「完全」「不完全」、「善」「悪」は全く意味を持たないと考えているわけではない。もちろん、全自然という立場で考えるならそれはその通りだろう。しかし、まさに人間の幸福や福祉が問題となる時、「完全」「不完全」や「善」「悪」は人間にとって有益でありうるものなのである。その際、「完全性」の指標はわれわれにとって外在的なものとして存在するのではなく、われわれ自身のうちに内在的であるものとして現れる。それは「感情」としての「喜び」と「悲しみ」にほかならない。われわれが「喜び」を感じる限りにおいて、われわれの「活動能力」としての「完全性」はより増すであろうし、われわれが「悲しみ」を感じる限りにおいて、われわれの「完全性」は減ずるであろう。「善」や「悪」といった概念も、われわれにとって外在的ないしは超越的な権威としてあるのではなく、以上のような「完全性」の移行において資するものが「善」であり、妨げとなるものが「悪」と言われるようになるだろう⁷。

人間の幸福や福祉について「完全」「不完全」そして「善」「悪」といった概念を用いる時、わ

れわれはスピノザの言う「完全性」の意味に基づいて考えてみる必要がある。すなわち障害を負っている人や病気を患っている人について、彼らが「不完全」であるといったようなことは、スピノザ哲学においては外在的な価値観や権威に従うものとして批判されるだろう。それは表象に基づいた「完全性」を指標にしているのであって、当人の有する本質とは何の関係もない。すべての人はその本質において「完全」なのであって、その意味において、障害を負っている人や病気を患っている人といわゆる健康と言われる人々とは全く同等である。したがって、例えば「健康」を目的とする医学（医療）において、その「健康」という概念が「完全性」を目指すという価値観と無縁ではないならば、その「完全性」が「一般的観念」ないしは「一般的定義」といった表象に基づくようなものである場合、それはスピノザ哲学においては批判されることになるだろう。確かに、『知性改善論』で述べられているように、われわれの目的とするものは「人間としての最高完全性へ到達すること」⁸である。しかし、ここで言われている「人間としての最高完全性」がどのようなものであるのかはもはや明らかであろう。それを理解して初めて「健康はこの目的に至るのに大切な手段だから、全医学が整備されなければならない」⁹とスピノザが述べていることが意味を持つに違いない。

注

スピノザのテキストはゲブハルト版スピノザ全集（*Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters Universitätsbuchhandlung, 1925）に拠り、慣例（E：『エチカ』；Ep：『書簡集』；CM：『形而上学的思想』；TIE：『知性改善論』）に従って典拠を示した。引用は基本的に岩波文庫版畠中尚志訳に負っている。

¹ Ep19 [邦訳 97 頁]、括弧内引用者。

² Ep20 [邦訳 106 頁]。

³ Ep36 [邦訳 188 頁]。

⁴ E2P40S1 [邦訳上巻 141 頁]。

⁵ cf. CM 1/1 [邦訳 160 頁]。

⁶ E3AD2, E3AD3 [邦訳上巻 237 頁]。

⁷ E4Praef [邦訳下巻 11 頁]。

⁸ TIE§16 [邦訳 19 頁]。

⁹ TIE§15 [邦訳 18 頁]。